

特 100

344



始



37.10

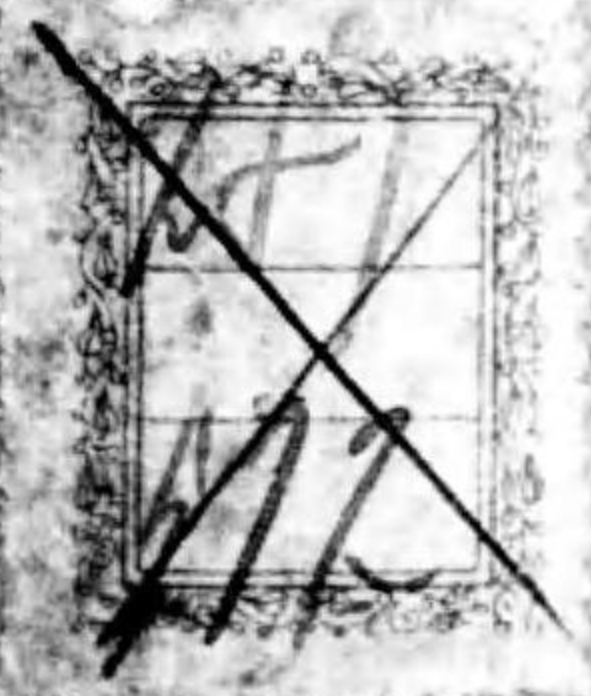
34

言靈學上より見たる

社頭の私見

本書を繙かむとする人士は、文章よりも

紙背にひらめく、活文字の精讀を乞ふ



特107
344

はしがき

日本のまつりが行はるゝ所は、神社であります、此の神社が
 外來思想の餘波をうけて、夫とはなしに國民と何か妙な、距
 りが出来た爲めに、其の行り方が何かに附けて誤解せられて
 ならない、世に云ふ國學者なる者が、是の弊を一掃せん
 て、味噌をつけた事は一再にして止まない、夫と云ふのも
 神聖な學に依らぬからで有る、佛教や儒教の教義を借りて
 ても、解ける者でない此の神道は――、余は斯く云ふ者の淺
 學にして、菲才神道と云ふ大きな者に對しては容喙するの能
 力者ではないが、こゝに社頭の私見と云ふ一巻を書いて見た

某の著

寄贈本

9.11.15
寄贈

勿論研究中の小品で中には訂正せなければならぬ所も有ろうし、誤解も有ろうが、發表する所は、從來の國學者流のカビ息い者と類を異にして居る心算で有る、文の拙劣と研究の淺い事は勿論だが然し、研究質問者に對しては出來得る限り、御答へする心算で有るから遠慮なく質問も御訂止もして頂き度い敢て希望します

大正九年八月

吉野川の清流に添へる

川上村迫の里にて

すがら庵主人しるす

もくろく

高天原	……………	一頁
黄泉國	……………	八頁
根の國	……………	一二頁
神、命、人	……………	一四頁
祭	……………	二〇頁
穢と罪	……………	二七頁
修	……………	三四頁
玉	……………	三七頁

鳥居……………四三頁
 御手洗……………四七頁
 祝詞……………五〇頁

以上

うさみだけよし述

高天原

高天原と云ふ文字が、初めて書籍上に見えて居るのは、古事の初頭に「天地初發之時、於高天原成神名天御中主神」と有るのを初めとして差支ありますまい、さて高天原と云ふと、誰しも神様の御いでなさる所とか、神道家が死せば行く、所謂佛教の極樂の様な所に、心得て居る様です、否斯様に間違へられるのも無理は有りませぬ、立派な學者等でも種々に誤解して居るので有りますから、さて我日本の歴史は此の高天原から書き初められて居る（神代史は歴史と見る事は出来な

いと云ふ學者も有りますが、して見ると高天原は日本歴史の頭になる理で有りますが、夫れが如何うゆう事で誤られたか、是まで一人として、是と云ふ様な適切な説を述べた者が有りません、高天原は近畿地方の近江國で有ると云ふ者が有れば、否常陸國だと云ふ否伊勢だ、朝鮮だ、吳國だ(昔支那に有つた國です)パピロンだ、馬來半島だ、アツカドの西南だとか、中部アジアのアーメニアだなどと述べて居ります、是等はすべて言語學とか、人類學、考古學、神話學、地質學等から研究した者で中には、参考になるべき者も有りますが、右に記した所が、高天原で有ると云ふ事は出来ません、なせなれば

よし或一点が神代史に記された事と一致して居たからとて、他のすべてが、是に遺憾なく適合せられたなければ確實でない、と云ふ事になるわけです、こゝで私しの意見を發表して皆様の御批評を仰ぐ事になりますが、高天原を研究するには、先づ其の發音からせなければなりません、是迄は高天原とかいてタカマノハラとかタカマガハラとか呼んで居りましたが、是がはたして正確な、訓讀で有つたでせうか、否々是れは本居と云ふ國學者が云ひ初めた訓讀なので、正しい讀方では有りませぬ、何となれば古事記の中に高天原と記した下に、高天原の下の天を讀んで阿麻と云ふ註がして有ります、すると是は

如何しても高天原（タカアマハラ）と讀まなければ眞實の解釋が出来ない事になります、訓讀ぐらい少々間違たつて、差支なからと云人も有るでせうが、夫は日本の言語學を知らない者の言葉です、日本には古來言語は特に尊重せられて居た者で、其語格などは嚴格の上にも嚴格に取扱はれて、紊りに一私人の意見のみでは訂正出来なかつた者で、其の言葉には必ず深遠なる意味が含まれて居た者であります、で日本の言語を發音した丈でも、其の大半の意は分まるのです、是故に日本の國を言靈の幸ふ國とか、言靈の天照國、言靈の助くる國と云つて稱讚した者です、故に、此の日本の言語學を名付け

て言靈學とも稱します、うれで日本の神代史を解釋するには必ず、この言靈學を修めてからでないとその研究が無意味になつてしまふ理です、幸言靈學の緒口を知りましたから、早速應用して見ますと

高天原のタは對照力、カは無形の力、アは顯れ出つる、マは圓滿方備、ハは延び開く、ラは還り來ると云義になりました、換言致しますと、日月星辰及び地球等一切を包容せる、方圓形なる大宇宙の全体を總稱した言葉になるのです。

是では餘り簡單で明り悪い人も有りませうから、今少し蛇足を添へる事に致します、で高天原は前にも述べし様に、天に

求めても地に求めても有りませぬ、即ち天と地とを包容したる全大宇宙の總稱で有ります、此の宇宙は初め瓦斯体で有つた者が、或る動機の爲めに活動し初めて其の自轉が激しくなるに連れて、四方八方に飛散して、星や地球や月を構成した様に解く星霧説が有りますが、此の説は新城理學博士（京都帝國大學教授）の説に依ると遠心力と引力とが、學説としては免に角、實際に於て符合しないと云はれて居ります、然らば新城理學博士の進化説は如何と云ふに私しが今述んとする説と大差ありません、其れは宇宙の最初に、日本書紀にも記されて有る様に、形狀定かならぬ各星となるべき原素が、空間に

7

群がつて居たのです、其の時にタと云ふ力が起つたが爲めに各原素が幽は顯に、陰は陽に、甲は乙に、有は無に、相對する様に對照し初めたのです、次にカと云ふ力が起つて無形の力を生じ、こゝで原素が形造られたので是をアと顯出を示したので、其の形造られた者は、對照力を平約に受けて居りますから圓滿方備で有ります夫はマと云語で示されて有ります、こゝで地球（地球中心説）から天空に向つて昇騰する氣流をハと云ふ延び開く言で示し、是に反して地球上面に下降する氣流をラと云ふ言で示したので有りましたタカアマハラとは宇宙の最初から現在の活動までを遺憾なく示した、大和言

葉なのです、是で高天原は神様ののみが住みます所で無い事が分明し、吾等の高天原の一閣に住む光榮を有して居る事になります、敢て曰ふ高天原は宇宙の總稱で有る事を、

黄 泉 國

この國は、伊邪那美命が山川草木及び神々を御産みになり、最終に火之夜藝速男神を産みませる時に御身を損ねて、行きませし所となつて居ります、して此の國は高天原と全じ様に種々の誤説がありまして、其の一二を掲げて見ますれば、栗田博士は、本居宣長翁の説に基いて今の伯耆國西伯郡弓濱附

近ぢやと云ひ、木村鷹太郎氏は言語學を基礎として、伊邪那岐、伊邪那美ニ神の黄泉國行の話は、彼のオーフェウス神話と同じで有つて、此の古事記の一段の記事の黄泉は、希臘テイバイ國にありて、其の土地には、伊邪那美命を埋葬した比婆山も有り又、伊邪那岐命の歸路に有る比良坂も黄泉戸の地名も古地圖には明かに記されて有ると云つて居られ、然して黄泉國の記事が異なるに随つて場所も異ふ事になつてをる、さて此の黄泉國を解釋するに就て、此の當時人類が発生して居たか否かを、決めなければなりません、でなければ伊邪那美命が神避りまして黄泉國に行かれた事になつてゐますか

ら、此の神が人格を具備してゐられた、神で有つたか否かを知らなければならぬからで有ります、然るに我が皇典の示す所によると、正勝吾勝々速日天忍穗耳命が人類最初の出生と云ふ事になつて居ります、で此の命以前は、人格を具備した神は無かつた事になります、詳しい事は古事記を眞實に解すれば、明瞭するので有ります、で此の黄泉國行の一段は地球進化の一段を示した記事で出雲國も伊賦夜坂もみな黄泉國と云ふ主体に附随した顯象で有ります、さて黄泉國は何處で有るかと云ふに、言靈學に依ればヨは天が下を意味し、モは我れ専らとなるもの（地球中心説ですから即ち地球です）、ツは冥

宇一貫の靈氣の質にして、天空の中第一の首領にして、機臨の大元、知量の府、循環昇降運行産靈の大元を意味する、ではを綜合すると地球と云ふ事になります、尙是の二字の字義を見ると、黄は説文に地の色と云ひ、泉は、水流の源、川の流れ出づる形を象つた字で、地球上に現れたる顯象を示したことになる、是に依つて見ても、死者の赴くべき意味は少しも無く、是を死者の行く所と解釋したのが先入主となつて今日の様な誤を來したのです、されば黄泉國は佛説の地獄と云のも、地球以外に求め様とするのも其れはヤボです、地球ころ、此の黄泉國の言靈名稱であるのであります、

根の國

名稱が異なれば、其の事物が違ひ、事が違ひ物が異なれば、其の名稱が違ふのは、洋の東西を問はず、昔から定まつた事であるのに、此の根の國を、前述の黄泉の國と同一視して居る者が勘なくありませぬ、随つて根の國を研究した者が有りませぬから、取りたて、申上る説もありませぬが、さて地球上に起る諸顯象はすべて、此の根の國の機能に依つて發生するのでありまして云はば、我が地球上に於て新羅萬象すべて目に映ずると否とを問はず、其の根源は、此の根の國に有る。

13

で有ります、然れば根の國は如何なる所に存するや、又如何意義を有つて居るかを少し述べて見ませう、根の國と云つた所から、或は地の下に存在して居るのでは無いかと、思ふ者の有るのは無理からぬ話で有ります、ネと云音は、一切を收め居る所の義が我言靈學により知る事を得ました、又根の字義から見ても、木の根を意味したる文字で、物事の本源、性情、氣力等の義を示す文字になつて居る、我等が常に此の地球に住居して居る以上は、地球を土台として、活動もし者もやつて居る、でこの根の國を見るのも、地球を基として見ると、一切を收め居る所か又は、事物の本源と云ふ事にな

ると、即ち地球の諸顯象の根源と云ふ事になる、是が取りも直さず、根の國の本質で有つて換言せば根の國は我か地球諸顯象の元素界、とでも稱すべきで有ります、故に人死せば其の体を構成する元素は、此の元始界たる根の國に歸る事になります、されば是の國を底の國と別稱したのは、人を本位として云ふた名なので、底と云ふ字は、人の到り止る意義を示した形聲文字で有る事を見ても明かです、

神、命、人

この神と命と人との誤解されたのは想像以上で有ります、神

の中にも、西洋の神有れば、支那の儒教に有る神、佛教に云ふ神、呼ぶ名は神でも其の質に到つては雲泥の差を生じて來ます、日本の神でも是迄國學者などの説いて居た様な、貧弱な神では有りませぬ、神様は、ろんな狭い小さい弱い方では有りませぬ、詳しく云へばなか／＼容易な事で有りませぬが、皆様が、神様と申せば直ちに白髪の異様の人物を想像せらるるでせう、是は外來思想が生んだ神様です、日本の神様はろんな、仙人めいた方で有りません、本居翁の言はれた様に、神といへばみなひとしくや思ふらん、鳥なるも有り虫なるも有りと云つて、神を實に卑下して居りますが、日本の神様は

又こんな方でも有りませぬ、こんな事を申すと皆様が御驚くかも知れませぬが、宇宙万有の活動は、皆神の御力で有りまして、神が何かを御使ひになるのでなく、活動其者が神様なので有ります、して見ると我々は日々神々の御活動の中に生息する事になります、是は私の私説でなく、皇典古事記が明かに證明して居る事實で有ります次に命は、如何なる方であるかと云ふに、是は神の御力に依りて形造られたる者で、人体を有して居らるゝ方も有れば、他の形をしてゐられる方も有ります、命と云へば一概に、人体を具備して居らるゝと思ふのは、誤りで有ります、申し忘れたが神様はすべて人体

を有しては居られないので有ります、若し夢などに、神像を拜したなど云ふのは其の眷族で有らせらるゝので有ります、命でも人体を有して居らるゝのも、ない方も有ります、が然し命は必ず形が有ると云事を御承知願ひたいものです、次に人は其の初め命に出で、天地万有を一身に受け納るゝの備を有し、一旦覺醒すれば宇宙の大精靈に同化一如するの機能を有する者であります、大宇宙必ずしも大ならず、小宇宙必ずしも小ならずとは、至言であります、人の力は或は牛馬に劣るで有ろう、或は象の大力には劣らん然るに彼等動物の行動は意志に伴はざる、行動である意志に伴はざる活動は其は

眞の活動と云事は出来ませぬ、某書に人小なりと雖ども其の内臓器官、神経系統、血脉系統等を験せよ皆悉く、ソーラルのシステムに相合して、分秒の差なきを發見せむと、宣なる哉人類に限つて附與せられたる言語音聲は、天惠中の最大特典で有つて言語の神聖なる事は彼の基督聖書にも

大初コトバあり、ことばは神と共にあり、ことばは神なりと記して有ります、日本の國でもこの言語を尊びたるは、古書よく證明する所で有ります、殊に古歌にも敷島の大和の國は言靈の幸ふ國てふ歌も有り、言靈の助くる國、言靈の天照る國等と其の讚美の語は古書を繙かばザラに見附ける事が出

來ます、斯様に洋の東西を問はず、言語を尊重さるゝも皆是、言葉其者に、云ふ可からざる活用と、思想發表には缺くべからざる者なるが故で有る、殊に此の言葉が人間にのみ附與せられて有るのは、考へれば考ふる程、深遠なる眞義を得る事が出来るので有る、人は何の爲に手と足を備へ足を以て自由に歩行する事を得、思想を何等のさまたげも無く發表する言葉を以て生れたか、説明は徒長になるから省く事にするが要するに我等人間は造化の補助機關として生れ出でたる事は神典の明かに説明する所で有る

祭 祀

祭祀即ち祭りであります、祭りと云へば誰しも、神前を裝飾し自己は美衣を纏ひ、美食を食つて、神前には若干の神饌と幣帛とを献上して祭祀を奏上して祭祀は執行されたる者と思ふて居るが夫は大なる誤で、今日の祭りと云ふ祭は、凡てが神をダシに使ひ、神を殺しての行ひばかりであります、何となれば祭と云ふ言葉は、故と真釣と云ふ言柄であります、大天地なる天球と、小天地なる、人間とを全く天秤釣に、釣り合す儀式であります、是を人間に行ふなれば、人の誠

21

の釣り合ひとなり、君と臣との間には忠となり、親子の間には孝となり、朋友の間には信となるので、人間でなく是を動物と人との間を以て考へて見ても慈となり愛となるのであります故に此の祭(真釣)が眞實に宇宙間に行はれたなれば関争剝奪といふ様ないまはしい言葉は、聞かなくとも、よい事になるのであります、神職が服喪中祭典に奉仕する事が出来ないのであります、喪其者に罪や穢が有るのでなく、死者を慰ぶ愛情やみがたく、随つて此子や産子の誠意を神に真釣り合す事が出来ないのであります、祭に奉仕する時即ち無私の境に入つて初めて行なはるのであります、此の祭の

眞實を具体化した者はツルギで有り、ツルギと云ふ語で有ります、ツルギを漢文字にて劔と書いてケン、ツルギ等の訓み刀劔等と同意味に用ひられて居りますが、其性質は、其名の異なる様に、形式も自然違つて居ります、カタナとは即ち片薙の意で善を助け、悪を征するの意で有り、タチとは者を断ち切る所から出た言葉であつて全じ者でも其の使方に依つて異なる名を生ずるのでタチカゼ等と云へば、其の有様の荒まじい事が慥ばれ薙ぐと云へば極く静かに聞くと云ふのも其の實際がタチと云ふ語の出所に比較して静かで有るからであります、さて劔は突き切る者で有るから、其の約言から出

た語で有るとか、或は腰に釣り垂れるから其を形容して附けた名で有るとか云ひますが、其は餘り輕卒な推量では有りませぬ、我が神道の根源から研究して見ますに、故なくして他を征すと云ふ事はありません、大和と云ふ我が國の古名は實に我國の實際を遺憾なく云ひ現して居る語で有ると思ひます、和をヤワスと訓じます争闘などの義は毛頭有りませぬ、争闘のなき國に、他を征する武器の必要を認めません、然らば何故に劔と云ふ器が有るかと疑はれるでせう、無理もない事です、劔を武器を思はせたのは、今の世の人の罪では有りませぬ、古く古くから此の思想が有つたのでもありません

中古外來思想が作つた誤なのです、今、古昔に立返つて申上げますればツルギは眞釣る義即ち彼我の平衡を量る義で有りま
す、御覽なさい劔は諸刃です、彼我両刃共に同形です、神の
持ち給ふ劔に片刃の者は有りません、天叢雲の劔にしても、
神度の劔にしても皆諸刃です、片刃は軍事陣中の用具で有り
まして、兵器兇器で有ります、干才はもとより不吉です、假
令、天國、宗近、正宗の銘刀でもカタナは劔の一片に過ぎま
せん、近來愛刀家の増すのは、何等かの兆で有ろうが、我々
は劔其ものよりも、劔の眞義を了解して其の思想の宣傳に務
めなければならぬ、是が大和民族の先天的の使命で有ります

我を愛する情は彼れ愛するの心となり、彼を苦しめる情は又
我を苦しめる心となるのです、故なくして彼を征すればやが
て征せらるゝのは天則天律です、是が劔の義なのです、御覽
なさい風呂の中で湯を前へ前へと押せば、遂には自分の後に
廻つて來ます、人を愛すれば人に愛せらる事は自然です、日
本民族は、大和の語を基として、此の劔の眞義を實行せなけ
ればなりません、基督教の打頬の苦も佛教の汗唾の苦も其は
一の教訓としては尊重すべきも、敵對せざるに睡する者もな
ければ、又頬を打つ者も無い理です
こゝに少し申し述べ度きは、皇室の御紋章の菊

と桐で有りますが、特に此のキリは劔の形を取つた御紋なので、キリとは即ち切りはふる意より其の鑿合でも有り、又花の形が劔の形にも似て居る所から、十六徳を聴く形の紋と云ふ意味が、十六の菊の紋と云ふ様になつたのと全じ理になるのです

ツルギには、神度の劔と云ふ宇宙活用の度を量ると云ふ義の者も有れば、天尾張劔と云ふ天地間の神律を衡る義のも有り天叢雲の劔といふ治國平天下の者も有る、草薙の劔といふ眞義を外にして、伊吹山の惡神に眞釣り給ひしが故に、恐れ多くも日本武尊は、精神上に多大の苦を受けられ遂に薨去せら

れたので有ります、尊むへぎは、宇宙の神律であり、守るべきは、ツルギの眞義で有ります

穢 ごと 罪

穢と云ふ事は、分かつて居る様で分り悪い問題で有ります、只だ何かなしに、私しは穢てゐますとか云へば、何でもない様だが、何故に穢れたのか、死家へ訪れたとか、墓地へ参拜した歸りだとか位が穢の最も重い者の様に一班に認められて居る、明治天皇の諒闇中に於て一般國民に穢の有や否やの事に就て入釜しかつたのは、諸子の配臆の新らしい所で有ろう

と思ひます、是等は被と云ふ事を忘れ穢の何たるを辨まへ無かつたから、生じた誤であつたのです、全体何ものに依らず動物の死と云ふ事が、直ちに穢なる者と關聯すべき者で有りません、生体と死体とは只だ温度有無、各神經作用の有無の差有るのみで外觀に於ては、何等の異状は認めません、然るに人死せば直ちに穢有る者の如く取扱はれて居るのは、何故で有ろうか、死と穢と相伴ふのは、死人に對して生存者が愛情の念を起し、爲めに生存者が心を冷靜ならしめる事が出来ないから穢が生づるのでありまして、死者其ものに穢が出来死者に障つたからと云つて穢が身に附くと云ふのではあり

29

せん、夫れで楠正成公や乃木將軍の如き人人の死は尊い者で、財産とかの爲に悶死した死は、實にけがらはしい者で有ります、で其の死の動機を生存者の心裡に取ることは、高貴の方(親族でも親の喪期の長いのは此理で有る)喪期が長く賤者に喪期の短いと云ふのは、死其の者が自分に關係が深ければ深い程、長く忘るゝ事が出来ず、随つて心を冷靜に保つ事が出来ないからで、關係の淺かつた人はるれを忘れるのも又早いから随つて喪期の短いと云ふ事になるのです、凡べて死に限らず物の汚穢を見れば心が亂れる、この心の亂を即ちケガレと云ふので氣枯れと云ふ字にあてるとよく意味が通

じるのです、俗に誰々は何のケが有るとか、彼の娘は男氣が有るとか云ふ、其の氣は即ち氣^キで有つて心なのです、枯れると云ふ事は、木の枯れるのも全じ意味で、氣^キがれるとは、其人の心が何となく、落つかないで丁度木の枯れた様にしなだれるから出来た言葉で有ります、こゝに重傷者が有て多量の出血をした其血をみたものが直ちにケガラワシイと云ふ、心が其の血に引きつけられて他事を考へる事が出来ず、何〇も是が念頭に浮ぶ、ろうしては其〇の事が思ひ出される、是が即ち氣枯れで有ります、血其者が身に纏はつて居ると云ふわけではありませぬ又女性が年頃になると月經が有る、是れを昔

から穢として居る、近代の生理學者は是を生理學上から見て何等の穢でない事を主張してゐます勿論私も月經其者に穢が有ると云者では有りませぬが然し是の爲に穢を生づるのは自然で有ります、即ち其の月經を人に知られざる様に、何はさて置いても其の身を繕ふから、他事が充分に行き届かない、月經の事のみを氣を取られるから勿論大事を行なつたつて充分の事は出来ない故に是をケガレとして居るのであります、又有機物の腐敗は自然の道理で有りますが、ともすると夫を穢の様に云ひはやす者が有る、是も勿論前に述べた様に、腐敗物其の者に穢が有ると云ふのでは有りませぬ、夫れの爲めに、自己

の心が亂されるから穢と云つたのです

天皇が薨去ましますや、一年間の諒闇と申す意味は、目新しい追悔に至尊が日毎に假殿に於かせられて、日供奉養を盡さる儀が有りますから、自然に生ずる、國民の大喪で、實に至尊に對する敬慕の念の發情で有ります、諒闇其の者が直ちに穢に對する期間では有りませぬ、然るに諒闇と云へば恰かも穢に對する一定の期間ある様に思ふのは形式に捕はれたる迷ひでありまして、穢と云ふ者が左様に長く續き且つ死者に有る者とすれば、神前に死んだ、魚や鳥を捧げる事は、無論出來ない筈であります、然るに、神職等は何等の心たきも無

く奉献して居るでせう、魚にしろ、鳥にしろ死の刹那には、自身愛情の念も有り、且又同類間には人間程でもないであろうけれども友を思ふの情も有つたであろうが、然し、死其者には、何等の穢もなければ、罪もないので是が何よりも、死、其者に穢がないと云ふ証で有ります、祭に先ちて神饌を修祓すると云ふのは、神饌其者の穢を祓ふよりも、神饌を取扱つた人の罪穢を忌みて祓ふので有ります、祓の眞義は、祓主の誠意と其の式の形式とが融合一致して行はれる者で有ります、詳しくは玉串の眞義を参照せられたし、罪は天律を犯した事の重なる意で積み積むと活用かして見ば分かります。

修 祓

往古から散齋致齋と云つて大祭の前には必ず、齋戒沐浴する日
 が定められて居た者であります、形式は異ふかも知れませぬが、
 此の齋戒沐浴祓の一種で有つて彼の潔の眞義を露骨に示されて居る
 様な感がある、と云ふのは潔ミツギとは其の發音の如く、身削ぎと云ふ事
 になるので、由來は身體に附着する、汚穢を取り削ぐと云意なのであ
 ります、然れば何故身體に附着する汚穢が神祭上に於て、邪魔にな
 るかと云ふに、夫は前章にも記した通り、若し自分の着する衣に惡息を放つ
 者が附

着して居た時には、其れに心が奪はれて、如何に、爲様と思つても不可
 能である、是が穢（氣枯れ）で有り罪で有る、身に不潔物を纏ひながら心に清
 淨を望むのは、濁水中に清水を求め、塵埃の中に清き空氣を求め、木に魚
 を求むるよりも尙一層の難事である、是は自分のみならず他人にも、類を及
 ぼす事であるから、よし祭儀に非ずも、多數民の集合する際は餘程謹まねば
 ならぬ事である、當時の娘共が無意味に、白粉を塗つたり、香水を點する
 などは、度を過ごして返つて弊を求め、事があるから是等も、大いに注
 意すべき事柄であるろうと思ふ、少し横道へ走つたが、近來流行する、冷水浴も冷水

摩擦も此の潔の一種なので、我國には上古より既に存在し國民が實行して居つた事で、今更洋學者が事珍らしく解き立てる等は片腹痛い次第で有る、此の潔は身の不潔を清めると云ふ外に、精神統一の手段として用ひらるゝ事も有る、修験者がする寒行などは即ち是で有る、寒風凜烈膚を破る冬の朝、水邊に立つて冷水を浴する時、如何なノンキ者でも雑念を去らずには居れまい、是に就て少し面白い私見が有るから、書添る事にする、ミソギのミは身即ち身體と云ふ事になる、ソギは削ぎの意で有つて換言すれば身體削ぎと云事になる、日本の神祭は由來精神的祭禮で有つて（體的方面の事はないで

はないが）心と心と真釣りで有る、是をミソギの方面から觀察するとミソギ即ち體的感情を除去すると云ふ事になつて、祭禮はツマリ精神一圖の行爲と云ふ事になるので有る様に思はれる、是はツミやケガれと云ふ方面から觀察して見ても、全じ事になるのであります

玉 串 奉 奠

玉串奉奠は祭典中の眼目で有りまして、祭典中に是の行事がなかつたならば、眞の祭と云ふ事は出来ないので、祭と云ふ者の眞義は、此の一行事に籠つて居るので換言するば、玉串

奉奠は祭を具体化した者で、祝詞奏上も、幣帛の献撤も、神饌の献撤も、奏樂もすべて是に附隨する一行事にすぎないのであります、斯く重大事が從來經視されてゐたのも祭の眞義が不明で有つたからで有ると云はねばらぬ、いで愚論を述べて大方の高評を乞はむとす

さて玉串の語源形式等を論すれば一朝一夕の事ではなく、是丈けでも大部の書籍が出来る事になるから、夫は止す事として直ちに、本論に入る事とする、祭は前にも述べた通り眞釣りと云義であつて、彼と是と、を眞實に釣り合して、平衡せしむる義で有つて、人と人との間に行はる、義理は勿論、人と

禽獸とを問はず生とし生ける者の間に行はる情も一種のマツリと云事になるので有ます、然して此の神社に於て行はるマツリは其の最上級で有つて幽政（神界即ち活動の根源）と顯政との釣り合ひでありまして、今日でこゝろ無意味になつてゐますが、上古に於ては、幽政の神秘を顯界に寫し、顯界の行動のすべては幽政に釣り合はされて、其の是非曲直が定められたもので、この行事は、嚴肅に行はれて居た者で有りま

す、解り易く云はゞ人間の肉体と精神との關係と同じて不完全な精神はやはり不完全なる肉体に宿り（中には特別の者も有るが）良き種は、良き畑に播かれる事になつて居ると同意

味で、如何に立派な結果を得ようとして、あせつた所で夫に相應する形式と精神が籠つて居なければ駄目で有る、さて横道へ走つてしまつたが、玉串の形式は、降神の際に用ふる、神籬と同形式の者で寸分の相違をも認めず、又違が有つてはならぬので有ります、神籬は降神後は神として尊祀する様に玉串は奉獻後は人の精神で有り体で有るので有ります、紙の四垂四枚、四四の十六は人間の十六魂を示した者で世の物事と云ふ物事は此の十六魂よりて活動するので此の十六魂以外には有るべき筈がないので有ります、玉串を奉ると云ふ事は自己の精神なり肉体なりを、誠の爲には措げしもなく捧げ奉

る、と云意味にもなり、此の事業は全く被祀者の功德に依る者で有る、故に我々は一身を捧げて迄も其の功を稱賛致し、まず祭の主意に依つて千差万別で一定し難いが要は、我が一身を神の御前に捧げ奉つて、神の誠と我々の誠とを釣り合す事になるので有ります、故にこゝに神我一体の形式が顯はれるので有ります、拍手は其の結で有ります、拍手は一致的で一度うつた拍手は、如何にしても元に戻す事は不可能で有ります、まず一度鳴つた音は分離する事は出来ません、然して其音は間一髪を入るゝ暇がない、是神と我とが相一致して間一髪をいゝに餘地なきを示した者で有ります

是の行事なり祭祀の爲方は世界の民族に對し、我等日本民族は大いに誇りとすべきであります、佛教の教義は尊きが上にも尊い者で有るが、其の行事の合掌に於て十指結合の理想は完全に顯はれて居るが措しい哉、分離する事は、甚だ容易で有る、是等は枝葉の愚論では有るが尙基督教に於ては、其の主神ゴツトの神に祈りを捧げる際、必ずイエスキリストを通じていなければ行はれない、と云事になつて居る、何れも世界の二大宗教が斯の如きで有るに獨り、日本民族の信仰が各民族の教に卓越して居るのは、何等に深い神誓神約が結ばれて居る様に思はれてならない、

此頃學生や生徒が神社へ參拜する時に、ともすると拍手を忘れてか、強いてせないのか知らないが、最敬禮をして居るのを見受ける、最敬禮至極結構では有るが然し、拍手に及ばざる事數等で有る、最敬禮を以ていかに敬意を表して見ても、拍手の様な親しい、神我一体の形式は表す事は出来ないの有ります、拍手には斯様に深い意味が籠つて居るのです、神を敬ふには如何しても、この拍手を欠いてはならない、是が云は、神道の生命であります

鳥居

鳥居と云へば神社、神社と云へば直ちに聯想する位、衆人周知の物で有り乍ら、鳥居に對する解説が充分でない、衆人も直接關係の無い事だから、餘り立入いて尋ねもしないから、田舎の神職も夫で済むが、夫かと云つて鳥居と云者の根源を知らずに、居る事は出来ぬだろうと思ふ、又一般の人も直接間接の利益問題で無いにした所で、知つて置く丈の必要は有ると思ふ、南洋通の學者は鳥居の形式及び、發音から研究して、彼地のト・ト・ランの移寫で有ると云つて居る、ト・ト・ランは彼地で鳥の飼育に使用する者で形式も、建設の位置も、我が國の鳥居の形式と、其の建設の位置とが同じで有ると云ふ所から出で

居る論なので有ります、高木博士も此説を同意して、我神社には昔鳥が多く居た者だから、其の止り木にあてた者で有ると云つて居るが、然らば今の様な廣大な者が昔から無かつた筈で有る、殊に清潔を重んずる社頭、然かも參拜人の通行する所に此の不潔な者を建設する理は、我が民族の様に清潔を重んづる者にはない筈である是れは鳥居と云ふ文字が先入主になつたのと、夫と南洋に左様都合のよい者が、有つたから誤解されたので有らうが、鳥居はト・ト・ランにして通り入りでなければならぬ、否通り入りと云ふ言葉の轉語に相違ない、で往古のト・ト・ランは只今の様に社頭に殺風景に獨立して居た者

でなくて、左右には柱から聯絡した垣様の者が有つた者に相違ない、伊勢神宮の八重垣鳥居を見ても明で有る、尙伊勢神宮の板垣御門、外玉垣御門、瑞垣御門等は、鳥居の實形式を顯示してをる、今の鳥居は、左右の垣とろして、屋根が無くなつた者で有る、思ふに社會の繁雜になるにつれて、顧みられなかつた爲に、今の様な形式になつて、鳥居と云ふ者は、此んな形式で有ると自認し、鳥居一基建設すれば事足れりと思ふ様になつてしまつたのである、又鳥居は社頭のみでなく、一般民家にも、有つた者で其の形式は、只今門松として残つてをる、此地方では、やはり鳥居と同じ様に松二本丈けしか

建てない様で、古昔の形式を慥ぶ事は出來ないが九州の一方へ行くと門私の兩脇には必ず數本の松を横へる様になつて居るとの事有る、是が昔は家の周圍を取りかこんだ垣の一片なので有ろうと思ふ、免に角鳥居と云ふ文字に重きを置かないでトリイ即り通り入る門と云ふ様に記憶せられ度い者で有る

御 手 洗

神社と佛閣の區別なく大体この御手洗の設けが有る、神社やた寺へ參詣するには元より身を清潔にして參拜するのに、今

又此の設備が有るのは餘計な者の様に思はれぬでもない、然しよく考へて見れば不必要でない事が首肯される、免角生物は、某一局部へ強度の刺戟を與へれば、心經は其の局部に集中して他事を考慮しない事になる、故に熱心な宗教信者は必ず、寒中に水行をやるとか、何かして、自己の信念を一層強く持続せしめん事を圖つて居る、彼の法華經信者等が、掌に油を注ぎ點火して修行をするのも、自己が念づる以外の邪念を忘れんが爲に身体に刺戟を與へる一法なので有る、掌に火を點じたからと云つて利益が有ると、云ふのでなく、精神の統一が出来る、出来ないが、信念の強弱、索いては利益の有無に

に關係するので有ります、と云ふ次第から、參拜者が途中で種々の物事を見るにつけ、聞くにつけて、心が散つたり氣枯れたりして居るから、手に穢が附いて居ると云ふ理でないが冷やかな清水に手をひたして、其の刺戟に依つて一切の邪念を除去し、清潔な心持ちになり得べき様に設けられた者の様に思ふ、伊勢神宮に參拜した人は、五十鈴川の清流に手をひたして、清々しき心持ちになつた事を記憶せらる、であらう、官幣大社淺間神社の涌玉池、國幣大社多度神社の御手洗川の流、官幣中社英彦山神社の汐井川、國幣中社西寒多神社の被川、いづれも天然の美を兼ねた、御手洗で有つて、此の仙

境に望まんか、求めずして清淨の氣を得、一切罪穢が被はれる様に思はれるのは自然の理で有る

祝詞

某人の曰く、神は全智全能に座せば、宇宙の進化は勿論、新羅萬象の成り出づるも神の意志に外ならずと故に祭典に於て奏上する祝詞の如きも、既に神の所知す所で有るから、事別けて大音に奏上するのは無駄な事であると、道理の有る様で有るが然し是は楯の一面を見た者の言葉で有る、今少し深く潜索して見ると、祝詞と云ふ事は祈り詞と云ふ事が轉した者

で祈りとは意宣りで自己の意志を言葉にして云ふ事になるのである、であるから祝詞は出來得る限り、明瞭な聲を出して奏上すべきで有ります、口の中でムニャ〜と云つて終ふのは其は祝詞と云ふ者の眞意を解して居らぬ者の行る事です、祝詞と云ふ者は、斯の如き者で發音せねばならぬと云事が、肯首せられたら今後は宜しく、明瞭な音聲を以て奏上せられ度い者であります、今神社で用ひて居る祝詞は眞假名を用ひて普通の人は一寸讀み難い者ですが是なども大いに改良して、片假名か、平假名混りの文体に直して一般の人にも誦讀致させ度い者であります、

附言

尙此の外に神道に關する私見も無いではないが、是で普通の問題は論じ終つたと思ふ、専門的の者は別に稿を改めて發表して見たいと思つて居るが、それが何時實現するが資力の乏しい者で有るからわからない

祝詞の言靈學釋義は國華教育誌に神道に就ての二三の論文は三重斯民誌に發表して置きましたから便宜參照せられたい

大正九年十月七日印刷
大正九年十月八日發行

實費金五拾錢

著作兼
發行者

奈良縣吉野郡川上村字迫
宇佐美たけよし

編輯人

奈良縣吉野郡川上村迫
宇佐美景堂

印刷所

奈良縣高市郡八木町大字八木
二百〇五番地ノ二
狩谷博成堂



終

